

土屋正義編輯

絵本石山軍記

八

持遠
2269
8



遠 14
2269
8

角鹿山

繪本石山軍記初篇卷之八

目録

信長大軍と率て北越小進發

并織田淺井不平の起原

遠藤春基主君と諫む

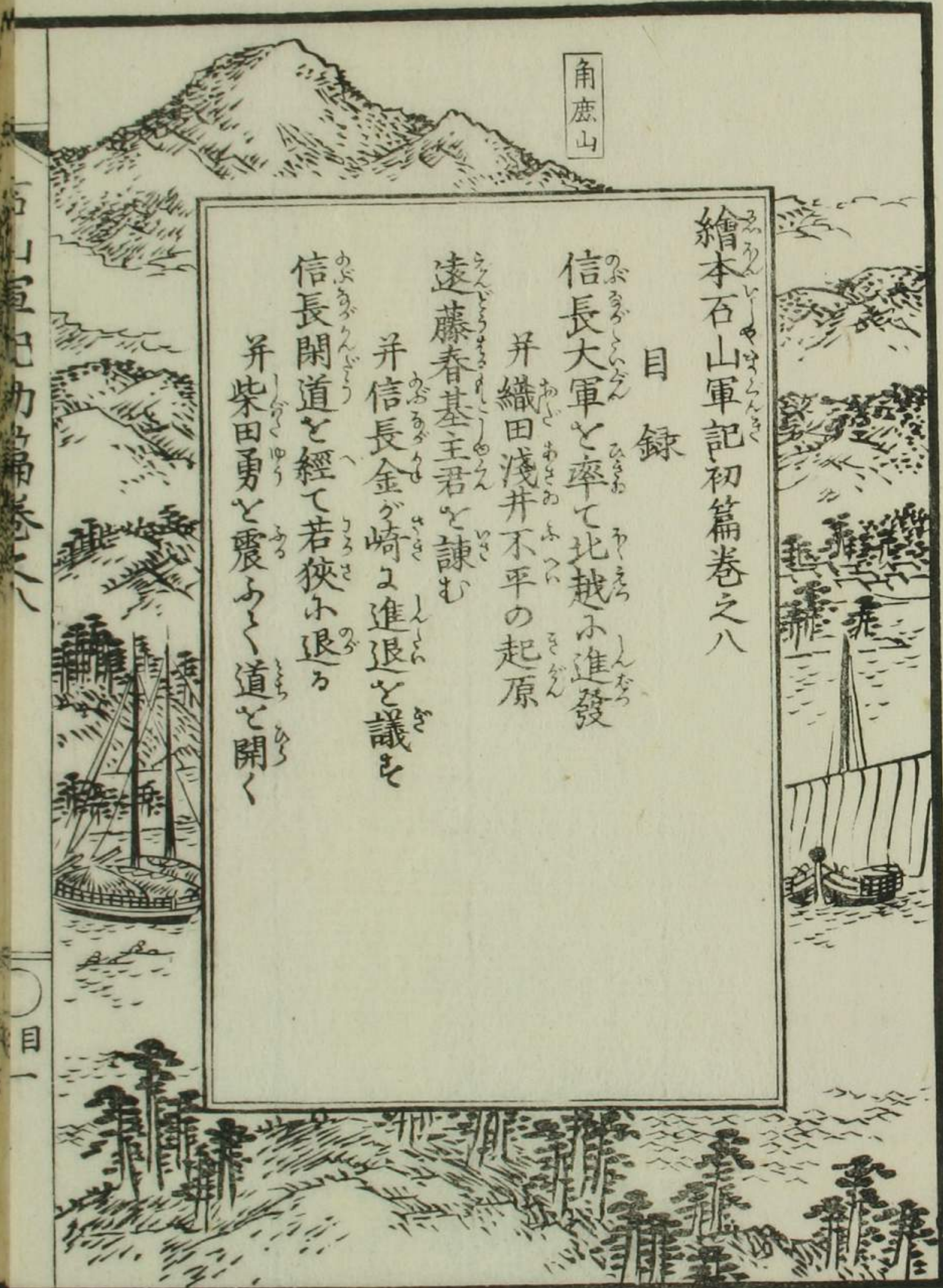
并信長金崎の進退と議を

信長閑道と經て若狭小退る

并柴田勇と震ふと道を開く

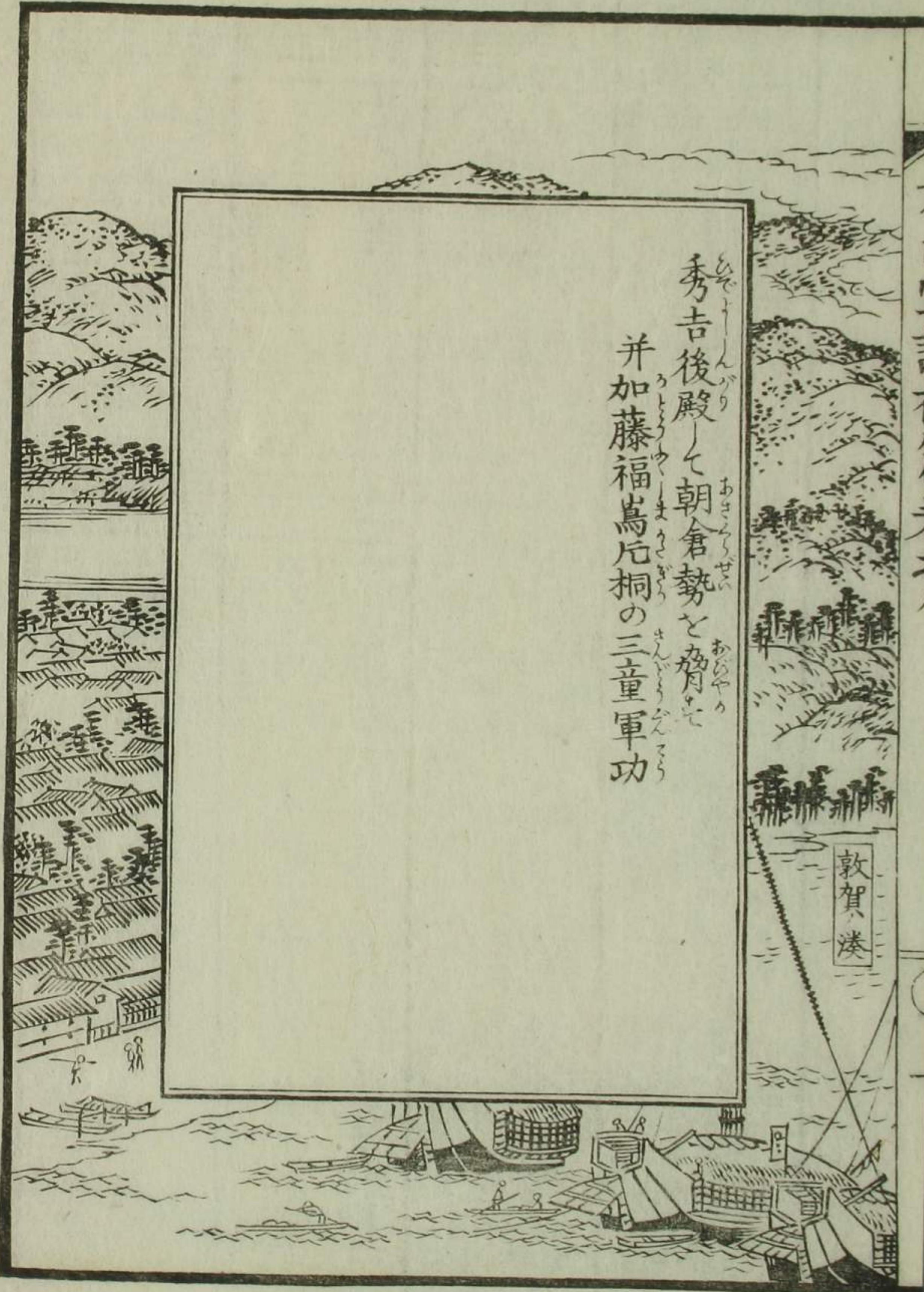
石山軍記初篇卷之八

目一



秀吉後殿と朝倉勢と脅と
并加藤福島后桐の三童軍功

敦賀湊



繪本石山軍記初篇卷之八

土屋正義 編輯



信長大軍と率く北越ふ進發に并織田淺井不平の起原

朝倉左衛門督日下部義景朝臣への志學の比よりも父孝景の遺跡
と續ぎ越洲の政道と執行を多々文武の両道ふ意と入瑩雪の學と
專と。文道最碩也。弓法へ小笠原の一流と究め。和歌へ二條の淨明
珠院晴良公ふ深秘と受々諸道ふ堪能の譽まを得られり。抑織田
朝倉の兩家へ俱ふ斯波武衛の家人あり。朝倉敏景武衛の分
國越前と押領せしより織田家と數代不快なり。先ふ新公方家
飯洛の後義景ふ上洛し。皆御教書と下さると雖も是も是も公

方家の上意（おのづから）あはれに某と謀りよせり討取らんと（のぶあが）の信長が巧あり
 んと（く）曾て召し應ぜざらん（なだ）。既（まじ）に三年（いとしせ）あべり故（ゆゑ）に今度其罪（とが）の事
 せしむる（さし）に信長（のぶあが）十万余騎の大軍と卒（つひ）に。永祿十三年四月廿五日の曉天（あけ）に越
 前国敦賀郡（ついで）に乱入（らんにゅう）を其勢（そのいきほ）ひ強大（まさ）なる事大鵬（たいてい）が大地（ち）と震（ふる）ふ異（こと）ふ
 らに郡内の貴賤（きせん）大（おほ）に恐（おそ）ま騒（さわ）ぎ立（た）皆山林（みやま）に逃（にげ）り（ま）ころり。時（とき）に信長
 金ヶ崎（かみさき）の城と手筒（てづつ）ヶ峰（みね）の要害（えんごう）のつぎまを先（ま）に攻べと（せ）ね。但（た）し味方（あじ）へ大
 軍（ぐん）なまき（ま）に二手（ふたて）ふ引分（ひきわか）り（り）両方（りやうほう）一度（いちど）ふ責（せ）べきやと。諸將（しよしやう）と軍議（ぐんぎ）とあり給
 ふ（たま）ふ明智光秀（あきらひかり）へ先（ま）に朝倉（あさくら）ふ仕（つか）へ。當国（とうこく）の實地（じつち）諸士（しよし）の剛臆（かうおく）の程
 も知り（し）てま（ま）先（ま）一方（いっぽう）と押（お）へ（し）一方（いっぽう）と攻め（せ）ん事（こと）然（しか）るべしと申（まを）に木下
 秀吉（ひでよし）が曰（いわ）く一方（いっぽう）ふ押（お）へ（し）置（お）き（お）く（し）一方（いっぽう）と攻め（せ）る時（とき）ハ勝利（しり）疑（ぎ）はと

密（ひそ）に計略（けいりやく）と言（い）上（あ）る（ま）ふ（り）。信長（のぶあが）心（こころ）を中（な）に大將（たいしやう）を（お）し（た）速（すみ）に會得（かいとく）ぬ（い）
 手配（てくばい）と申渡（まを）さ（し）ま（し）ころり。そも此（こゝ）手筒（てづつ）ヶ峰（みね）とつら（り）三方（さんぱう）平地（へいぢ）に連（つ）きた
 ま（い）に要害（えんごう）堅固（けんこ）に構（かま）へ（し）ま（し）も搦手（なほて）ハ大沼（おほぬま）あり（し）馬（うま）の駈（か）引（ひ）自由（じゆう）あり
 ざる（し）を頼（たの）む（し）別（わか）に柵（さく）を（お）と（し）も結（むす）む（し）且（かつ）番（ばん）の兵士（へいし）等（ら）も心（こころ）緩（ゆる）く（し）等
 閑氣（かんき）小見（せみ）へ（し）り因（よ）て木下（きのした）三千餘騎（さんぜんじよき）と（お）し（た）押（お）し（た）合戦（がっせん）と始（は）り（し）金
 ヶ崎（かみさき）より後詰（ごせつ）の勢（いきほ）來（き）る（し）其時（そのとき）木下（きのした）軍兵（ぐんべい）と引（ひ）き（し）け（し）れ（し）と防（か）ぎ（し）偽
 り（し）肩（かた）て引色（ひしき）た（し）く數臆（かずおく）し（し）と見（み）せ（し）ん（し）城（じやう）中（ちゆう）の兵勝（へいしやう）と乘（の）り（し）數
 と盡（つく）して打（う）て出（で）後詰（ごせつ）の勢（いきほ）と打合（うちあ）せ（し）木下（きのした）が勢（いきほ）と前後（ぜんご）より狭（せま）んで
 討（う）んと爲（な）る（し）べし。其時（そのとき）柴田勝家（しばたかつか）と坂井右近（さかいゆうぢ）の兩人（りやうにん）に三千餘騎（さんぜんじよき）
 と卒（つひ）へ（し）ま（し）城（じやう）の麓（ふもと）に伏居（ふしゑ）て城（じやう）へ討（う）ち（し）跡（あと）と切（き）て城兵（じやうべい）と攻

立べ。參州勢の南より責め畿内の輩の和田伊賀守松永彈正
 と俱ふ北の方より掛る。搦手の信長が自ら請取べ。偕亦佐久
 間右衛門尉森三左衛門尉池田勝三郎の三人の五千余騎を金
 が崎ふひひ城將朝倉景恒が手筒が峰と援んと打出。跡責
 掛らば景恒驚と後詰と止め引返さん。必定あり其時佐久間
 森池田三人共小能戦り。金崎とも取ん事最容易り。と下知
 一の諸將等畏つと領兼一各持場小發向せり。木下藤吉郎
 秀吉の大手の先陣と兼り三千餘騎。手筒が峰へ押せ。二
 手小引分秀吉の真先小進んで城と攻二陣。竹中半兵衛重治次
 さり秀吉の天性備る智勇ありて九人の及ぶ。是非と重治も

又軍機不熟せ。武士あまは此手の兵士三千餘騎の尋常の十万
 余奇不駈合とも劣る。進むも退くも自在。唯一身の
 如く小見へり。去程小此合戦大將の下知あり。謀略の的を
 まは敵兵防禦の術を失ひ足田右近九股左近亦乱軍の内討
 死し残兵も或は落行或は手と負ひ立足なく散々小敗軍を城
 將の寺田采女の万夫不當の勇士あまは味方大半討ま。程小
 果々しく見へり。信長を此時ぞと下知あり。搦手
 の丹羽五郎左衛門前田又左衛門。佐々内藏助亦大沼と異ともせん。
 馳入々々乘破ま。南方の勢大手の寄手一時小乗込で突立斬立
 働く程小城兵残らば討死し寺田采女津波甚四郎亦是迫也

して自殺せり。此時木下が手小討取とらるの首百五十余級とて
 関へ手筒が峰の要害唯一日小落て信長手始めの吉相とて
 大小喜悦あり。あいつ木下が籌策諸將の粉骨と称美あり。借亦朝
 倉景恒の手筒が峰の後詰とて打て出し。織田勢不意小後廻
 り。本城を襲とんと爲り。と関引返さんとせし。如と佐久間信
 盛池田信輝森可成が五千余騎小遮ら。十死一生の術と尽し。二
 千餘奇の軍兵過半討死し。辛あて城小引入り。織田勢も數刻の
 戦ひ小勞き。信長の本陣より城攻へ。明日と下知ありて。其日
 へ軍を止め。あふ介。後秀吉例の智略と以て味方の損失せざら
 様城中小使者と遣し。利害と説て諭さ。められ。景恒も其理り

伏し僅小大人許の士卒と召具し。金が崎と退城し。義景が本城
 一乗谷も趣とられ。秀吉頃て瀧川彦右衛門山田三左衛門兩人
 小城と請と。手勢五百余騎と引分。景恒と守護さ。府中の辺
 まで送らせ。る。ふ實情ある。振まひと聞人。大小感。らる。其後金が
 崎と破却し。る。ふ。朝倉家第一の要害とせし。兩城二日の間小
 落。る。大將始め總軍。い。此勢ひを抜。さ。て直小。今庄。鯖波
 邊。ま。乱入。せ。る。と寄。る。手段と議。せ。ら。る。

近江国北方五郡の守護坂田郡小谷の城主淺井備前守長政去る
 永祿十二年の正月三好の一黨蜂起の由関と齋。上洛し。御所の
 守護小在陣。と。信長悦び。此度御所造營小淺井。も

人夫と加勢あつてと頼ませぬふり。長政子細小及ぶん兼引
 一洛東清水寺小宿陣して日々小人夫と出して普請と手傳いと
 れる然まども容易くする大營ある人夫大勢勞る而己あそ
 行届さうのころ。信長の宣ふやう戰場小臨と忠と致さる土
 木と運びく功と速ふるも公方小竭を志い同し事さる此造
 管人夫小任せく數日と經ば禍必だ蕭牆の内小起る。然るに
 諸士も士卒も人夫小打交すく土石と運ぶ片時も早く成就せ
 しむ。信長手本と出さると赤色の小袖小赤地の錦の半
 臂脛切一草鞋とくいて石材木と運ぶべ柴田佐久間坂井木
 下丹羽森佐々前田の歴々ありいづく小装束つけ人夫小混トカ

と盡しと見て。淺井家の諸士も徒小是と見過ぐぐ家老
 諸士づも身輕小出ら織田家の諸士小うち交り竹石と
 運びる。然るに一昨年江州の戦の時箕作和田山と責る小至りて
 淺井家の兵士と以て觀音寺の城と押へあつるべし。信長より頼
 まさし。長政元より佐々木家とも親しあまは如何ともして
 六角と織田と和睦しとせ度意なり。此備への事と進まば
 其返事の趣と信長の心小叶う。然るに吾旗本の勢
 と以て觀音寺口と取切ると。淺井への頼む止らさる是より
 して織田家の諸士の淺井の名ぐううと武道小鈍と弱將あり
 と嘲り居り。事あるに織田家の兵士淺井の諸士と侮り

輕んぢとども。信長出て諸とふ運とま給ふとゆ。淺井の家臣
ハ慎とと萬事聴ぬ負とと打過ととらふ織田の兵士ハまく
圖ふの我終のと振すいり時ふ信長の宿所妙覺寺ハ在
京の諸家ハつと及ぶん洛中洛外の寺社地下人近国の任人ホ
種々の獻物日々絶る隙あり門前實ふ市の如くなり
信長その献物の品々何ふと引分て半と淺井の宿陣清
水ハ贈らと縁者の好とを厚くありあひるふ其品々と持行
兵士等淺井の兵士の聞る前とも憚り貫ふと飽ぬ世の
風あまども江州者ハ別して欲心ふく軍場の辭退とまとと
利徳の方ふ一足も引事ありたふ人の呉る物ありとも過分

の品とハ先辭義ととて通例の人情あり何と贈りても更ふ
辭退の會釋のあま扱々鐵面皮者とも哉と罵り嘲ると數回
あつと淺井の兵士等とくも何り遺恨と晴えと思ふ折
御所の惣堀と信長の下知とて淺井佐久間柴田森等ふ分
て堀せられと淺井が良等三田佐右衛門が手の者と柴田佐
久間が士卒と右の悪口と咎めとて終ふ爭論ふ及ぶと三田
ハ此頃の無念と怖居り一時あま手の者どもの爭論と幸
ひふ彼悪口せし佐久間柴田の手の者と散々ふ打倒しとらふと織
田家の兵士等と狼藉とと鎗薙刀と以て突合斬合せし程ふ
終ふゆき合戦とと長と諸士も是と鎮むると能ふ後



丹羽長秀



織田の君臣將
軍御所經營
の材木土石と
運ぶ

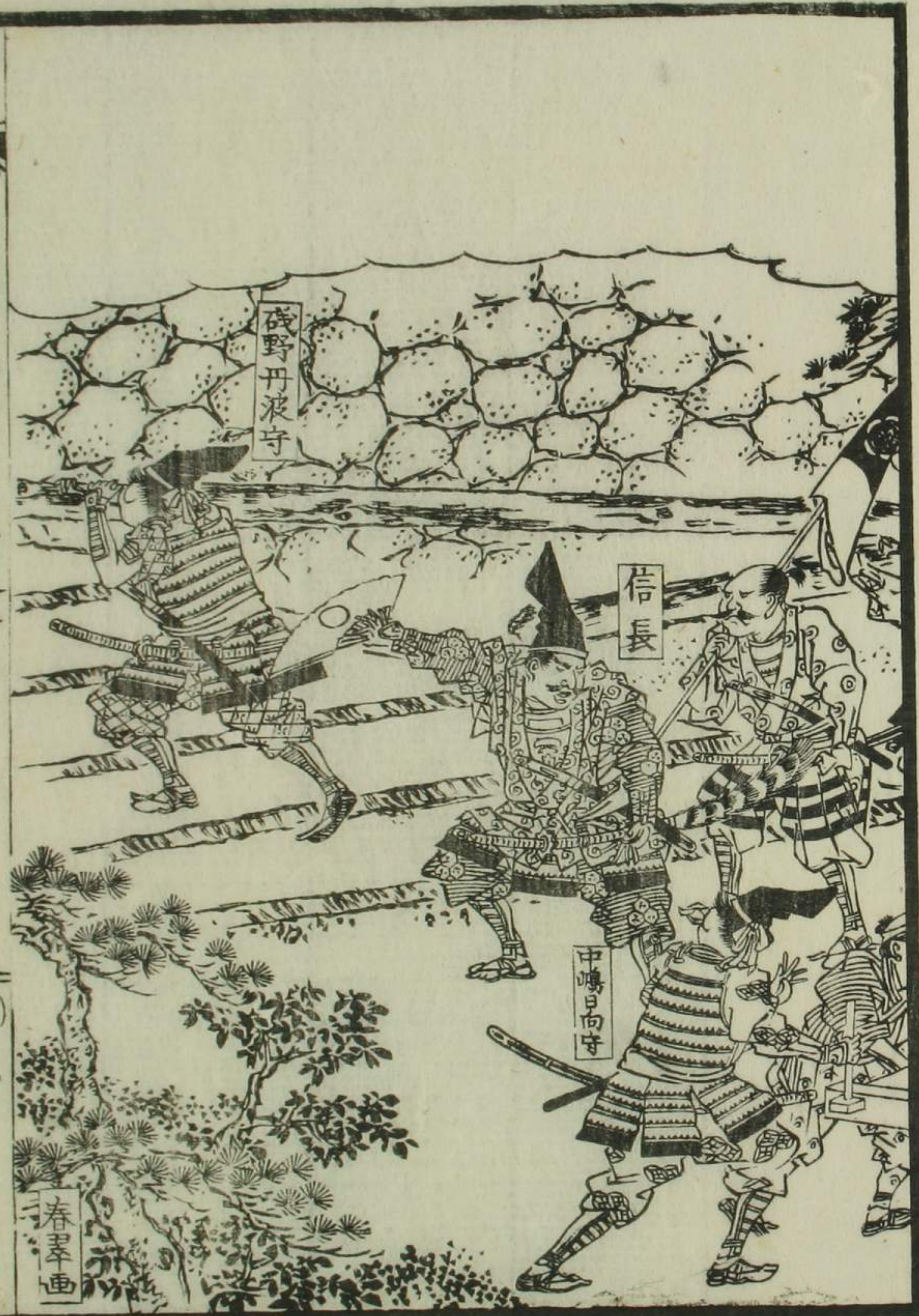
柴田勝家

春翠画

佐久間信盛

木下藤吉

スレヒヨ書存本卷二ハ



其

二



柴田佐久間も出て戦へば浅井方も遠藤喜右衛門中嶋日向守の輩も出對ひて戦うなり此人々の双方も小制一宿んと思ひ出て止と得ざりて入乱軍となりて數刻小及べり信長是と聞しゆ輕者ぶりの口悪き常の事なり長氣ありも取上て御所の經營と疎ふるを以て浅井の手の者近頃奇怪なり自ら馳向ふ事と糾んと有るを木下藤吉郎を以て制め殿の出御候ふて却る事六敷あり候ふに其御使と糾りて鎮め申へし諫めつ尺一騎馳出たり是尋常の事あり制しと即ち小禁中へ伺候し傳奏ふつて右騷動の始末と申上勅諭の由を以て是と鎮められた段と願ひしに神妙なりと御許し有程ふ

木下大悦び内裏と立出駿馬小鞭とありて此戦いの場所小乗つけ大音聲と發り畏くも一天の君の勅諭を雙方戦ひと止て謹んで承りて呼ばれ流石王土方り王臣なり勅諭とて声小忽ち左右へ引分と鎗長刀と伏て平伏を其時木下勅宣の御使ありて下馬を以て言し因とて一面々たり小兼りて其方ども在京りて事何の爲ぞや非常と戒め狼藉を禁止して王城守護の役ありて哉其徒が同士軍りて法やあり且今般公方家の館ありて小造營の爲小粉骨と竭りて聊の言葉戦ひたり又傷小及ふ事短慮の至り言小足ど早く遺恨と散れ和睦と結び經營の忠節と致とて口論の始末と糾明せば善悪より小明白ありて元より

近親の間がうなり。深き宿意あるを謂ふ。依て穿鑿の所御宥
免わらざるの宣旨あり。次小殿の御説へ何事も勅説に従ひ奉り。
早々和融と取結ぶ。一浅井の衆中も長者より禁裏御所の
近邊より心得らざる事なり。何ふまじき経営と急ぐと專とある
べし。遺恨あるを謂ふれば。雑言過言の詮義ふ及ぶんと仰出
さきて候ふなり。將軍も同様の台命ありと述べたり。浅
井備前守長政も出来り木下と對ふ。無骨の家人等が争論
駈入して。朝廷の叡聞不達。一宣旨の御使と下されし事。恐入奉り候
下僕も何等の御答と蒙り候も更ふ申分あり。所却て寛宥の
御沙汰不預る事。重帖あり。此御恩と思ひらる。御修理の

事聊等閑小仕るまじ。候ふ且長政數あるを以て。織田家と一
家の好むと厚く仕り候ふ身の何の異心あり。勅説の御請台
命の御答へ空しく願ひ奉り。謹んでこれを述介。後三田遠藤中
嶋等へ下知あり。恐れ入て蹲居せり。次小藤吉郎味方の兵士小
夫々演説あり。柴田佐久間も今更ふ面目もあき。次弟あや
早々手の者と引連て退出せり。木下本陣へ泰上。事安全小
和睦仕り。いよと言上。これ信長悦びせぬ。木下が勸。今小始
ぬ事あり。手柄の由と賞せ。但織田方あき。五百三十余
人手負い。浅井方あき。三百八十余人傷。誠不慮の珍
事とりあへ。然れども柴田佐久間憤りの氣。散せ。重めて

淺井の讒言とありける故信長も又怒りあぐも木下るまを諫め
て宥め奉りしみる。織田殿も納得しあひ改め清水の淺井
の方へ使とつて聊も別心ありし由申送らる懇ふ音信ありし
る長政も別使と以て弥疎意ありし旨と申述らる先表向
ふ無事小治まりしども信長内心小淺井へ心中計りける者あり
時節あふ討果とて思ひ立ち長政も又信長とつ
せし思ひ初らるるを

遠藤春基主君と諫む並信長金ヶ崎小進退と議を
江州小谷の淺井父子信長と縁者ありしも去年御所造營の争
論より以來両家の間何となく親しくは不快の容子ありし今度信

長上洛ありと不意小越前へ出馬ありしに淺井下野守久政大り
怒り子息備前守とて一族郎従を集め信長先年の約束と背
き一應の斷りもなく朝倉退治とて越前へ出馬の事前代未聞の表
裡なり斯手の裏と返と如き心ありし頃て當方も馬を向んと必
定なり先んぞる時に入と制し後より時に入小制せし早く別心の理と立
つて朝倉へ契約の義と守と居丈高ふありて言さるる諸
士一同小信長が表裏と憎と御尤の御義と申とて遠藤藤喜右
衛門進と出とまい時小よりと夏あつて後悔先小立とて斯事に
てい先年愚臣が信長と討取らんと申せし時御父子も御兼知るく
今更御別心の義御無用小存候ふ殊小信長當時の天下の権と取り

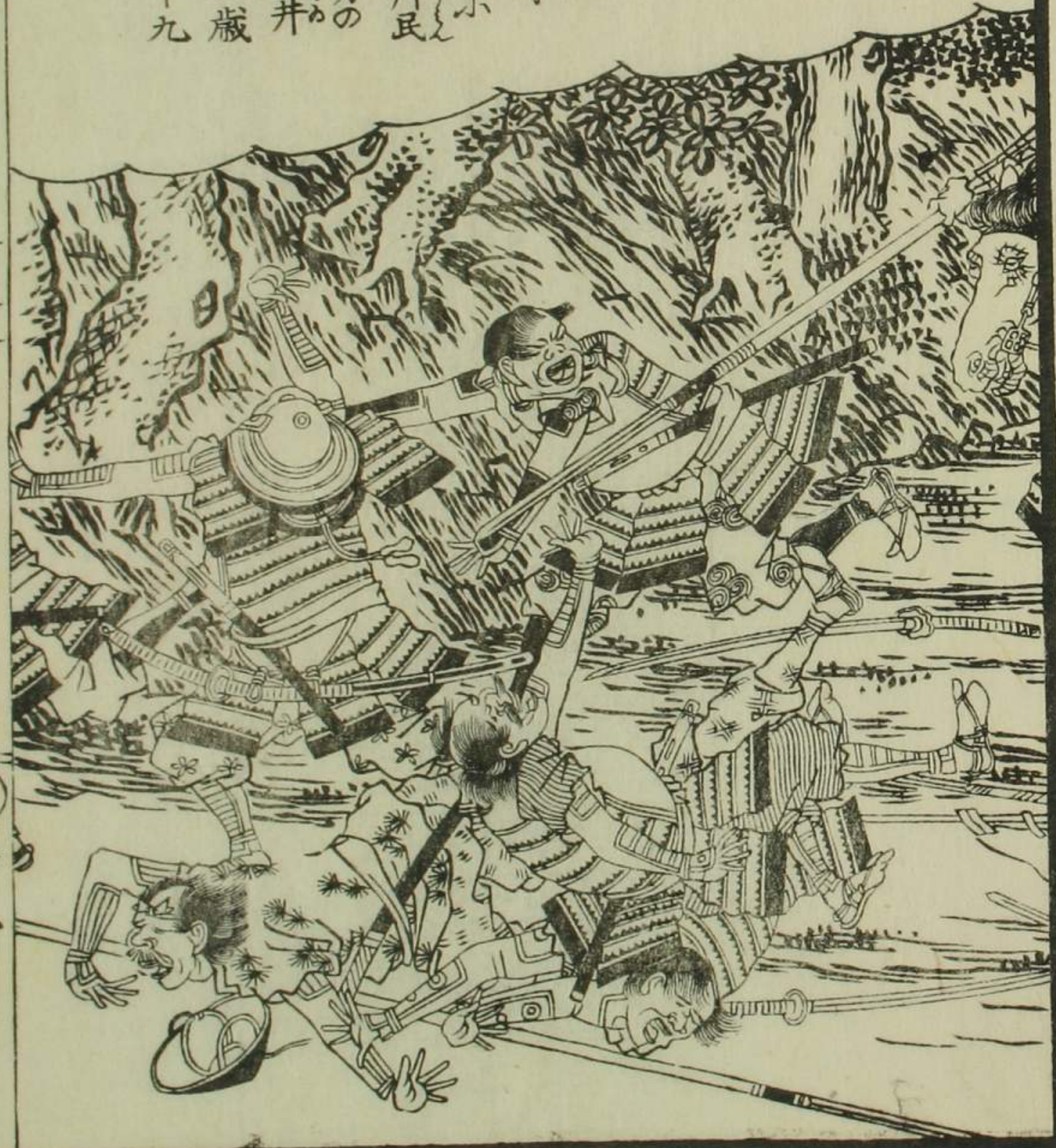
畿内五ヶ國美濃尾張三河伊勢近江若狹數箇所と切從一勢の既ふ
強大し向ふ所敵多し之に當家朝倉と合体あり候ふとも僕
一國半の兵士あり争ひ叶ひ候ふと先年より違ひ今信長と御縁者
の義あり只管織田家と入寇ふ為ありんと當家繁昌の基めて候ふ
べし朝倉家との格別の御誓約もいづれも今度の軍に信長が私の戦ひ
うらひで天下の爲ふ不禮と糾し不義と戒めらるゝ爲と因りいづれ
將軍上洛の後三年小及べども朝倉泰勤せざる條公儀と重んぜざる
慮外の罪過なる誰なる是と憎まざるも信長將軍の仰と蒙り其
罪と糾さん爲越前小出馬せらるゝ事十分の道理小候ふ然ると當
方別心あり朝倉小荷擔ありて天下へ對して不忠あり當家滅

亡遠くぐんぐん然らば長く信長と懇意ありあふと事御家の爲
第一義は存じ早く大將分一人織田の陣へ御見舞うて遣はれ
り。信長悦んで弥當家と重んぜらるゝ候ふ。あゝ強て朝倉へ義理
立どと思召らるゝ。信長へ御断り仰らば越前へ御使と遣はれ義
景上洛ある中御勧め有て朝倉織田両家和睦の儀と御計ひ
有べし義景上洛して罪と謝し申さるゝ將軍家も御免あり
事いも候ふまじ。信長又こそと支へ申さるゝ道理ゆらぎ返らるゝも
此方より御別心のこと然らばと詞と盡して諫められ赤尾伊
豆守傍より此義實ふ十全の儀小候ふ織田家と手切の事堅く
思召止り給ふと申さるゝ長政は其理小伏し同心の趣あり

一も父の久政とて用いど苟も武士の誓約の金鐵のて先
代の時朝倉の扶助ふりて我家全と事と得り然るに今更何
ぞ義不背と朝倉を見捨ると有べと喧とく宣へ物心得ぬ輩
つとも是は雷同いりぬ信長の表裏行末とて頼とく。此
時幸ひ別心思召立ぬと勸うを長政も力多く父の命は隨朝
倉と牒合せ前後より信長と狭と討つふ一決即時は浅井福
壽庵ふ木村喜内之助と相添へ朝倉が居城一乘が谷へ差遣り先
代契約の如く一味同心とて旨と述其謀略と申送り信長義景
大に歡び浅井の義心感多く餘りあり當時不得がたに武士とて
とて使者と厚く饗應し改め誓紙と送り何時とも御相圖

次弟打出申べと約定して使者と返され浅井父子は合戦
の用意と爲べとて即ち熊谷忠兵衛尉河毛三河守小織田家より
贈らまし誓言文とりを織田の陣へ返却せしむる遠藤赤尾の歎
息一當家の滅亡遠ううんと思へども力ありて諸共軍の用意と
ありし。此時織田信長の金が崎ふあつて軍の評議有る如く
浅井の使者来りて事の子細とく起請えと返りし。昨日
より粗風説もせし夏あまは陣中俄小騒ごうとて静まらん信長も
驚ろくせあひるるが松永弾正久秀と招とあひ浅井別心と飯路と
支へん足下の老功の武士なり何みて然るべと裁計らひ給へと
有るれ久秀兼り君とくくと當国へ御出馬あり案内知し召ては

淺井父子愛心と
 信長の飯路と遊り
 討つんとて石山本
 願寺の加勢と乞ふ小
 任せ門徒の浪人郷民
 ホ一万余人織田勢の
 退口と支也此時淺井
 備前守長政二十六歳
 父下野守久政五十九
 歳と云ふ



柴田勝家
 門徒の一揆
 と敗る圖



春翠画

進んで越前と平均ありぬ却て浅井と討せぬとて初て當地
へ發向まり、御不案内の事あり、兩城と落し給はく御威光と示さ
せぬ上、御馬と返さし浅井と御退治あるとて候ふ是より奥
より木目峠追坂榎木をくち切處多し容易御馬を進めしと申
る是は信長松永が心中と探りぬ謎にて久秀信長小隨ふと
ども本心如何と疑ひぬ故に此進退と問ぬなり進めといふ松永叛
心あり退けといふ實意ぞと思召るる小松永もさる兵あるは信長の
心中と察し疑くるまじき爲小斯の答へ申せしあり信長解顔と打
笑ぬ老人の軍議所理あり然らば早々引取べしと諸士と集めて評
定ありるる小木下藤吉郎申せし味方大勢あるは引口別して難義

ありし諸侍大將等と早く退せ後陣と二手小分て殿より間道より
引せし本道へ臣ホと以て殿の行粧とて定例の如く押せし
べし。浅井が目ふくく殿の御旗のありし諸將諸侍等の難あり退
課せし御旗と目ふくもて浅井が手の者支へし蹴らして通
りし何の難と事候ふと謀りし先諸士大將の人々と速く引
せし信長重徳と宣く按ぢる小浅井定めし義景へも謀り合せし
ありし若朝倉が追討せし如何とて又此傍辺の者等も我退くと
見れば後と追來るべし。さし此殿を七大事あり跡をくく押えし
しは容易引く難しんと諒しあり候ふ置し兵士馳入り朝
倉勢三萬あり義景出馬と見て府中の辺小出張候ふと往進し

々々皆々大小駭き味方の軍勢大概退く今旗本計りと成
まり然る小義景荒手の大勢あつて出張し且土地案内の敵あるは頗
る難義小及びあんと氣を傷めり木下藤吉郎進み出義景出張し
要時も猶豫あつて早々御立退あつて候ふ秀吉あつて止り追蒐奉
者と鬮留申さんお杯を一晝夜が程い支へごん其隙う江州路へ入せ
あつて。何き秀吉の後より追附奉るべしと申さるる信長も諸
士一同木下が武略と感し其詞小従ひつ引退せあつたり

信長兩道と經て若狭小道る并柴田勇と震あつて道と閑く
朝倉義景出張せし府中より金ヶ崎まぐり其間行程九十二里許りて
僅小一日路と聞えり織田家の諸士恐怖して氣づひしと木下

藤吉郎踏止つて敵と支ゆと由申るあり日頃秀吉と不快の
筆も早く退事の嬉しむ秀吉と稱美し矢玉薬など合カ
四月廿八日申の刻分秀吉が指揮の如く味方と二手小引分信長
より森三右衛門尉佐久間右衛門尉前田又右衛門尉佐々内藏助等
と従へ山越の兩道と退あつて柴田権六坂井右近池田勝三郎蜂屋
兵庫助塙九郎右衛門尉福富平右衛門尉等二萬餘騎本道と大
將の退とあつて旗馬印長柄の鎗定例の行粧うと徐々と
引りたる。諸亦浅井長政の軍慮小賢しと大將あつて我勢の
て信長の大軍の支へごん先小別心の使者と金ヶ崎へ立ざり以前
小摂州石山本願寺上人へ使者と遣り江州の門徒等して加

勢あり下れ候ふやう余義あり頼もろふより顯如上人も浅井とい
 師檀の間ごとといひ。朝倉と縁者なり旁々の好むは是等閑ふ
 り難う。木願寺より江州の大坊主衆へ下知あり。故門徒の
 浪人郷民と駈集め一万余人信長の退口の切處に出張して長政大
 悦び今やくと待處小織田の旗の手見へ。驚破信長ごんるれ
 と此彼の詰りく。一同小起り立道と遮り討んと。柴田権六勝
 家真先小進と。敵の形勢懸引の容子何れ浪人郷民の寄
 合勢と覺りて果敢くも見へ。勝家呵々と打笑ひ可様の
 敵い何萬騎出るとも物の數く。いで蹴散し通らんと。手勢と纏め
 て鎧と打り。號ひく駈入前後左右突立く。馳廻ま。門徒の一揆

等柴田一人小切立ち。散乱し見へ。所へ浅井が兵士入る
 戦ふ間小。二陣の門徒等起り來つ。三方より切て掛る。坂井右近
 同久藏池田勝三郎塙福富も一同小。走りかつ。面も振む。切立突
 立戦ふ。是等織田家小名と得る。刃金と鳴せ。武士多し。一
 突も切も尋常あり。一揆散々。打負し。土地案内の者小
 あま。彼方此方と走廻り。迫りく。小待りけ。鐵炮と兩の如く放ちけ
 り。小織田勢大小迷惑。疵と蒙る者多し。名小。あま。男士の
 徒多し。是等の事と煩ら。駈破りて。通り。浅井の軍勢
 等。伺ひ見。小信長の旗印。夫あ。大將。見え。あ。諸
 信長道と。退り。見へ。無益の軍ぞ。早引と。下知し。

人数を引上ぐる斯有程小織田勢も是と強て追こなくも有
 べしと悦ぶ勇も静小馬と乗しゆく坂本へて引取ぐる大將信長
 ろの三千餘人を卒一閑道と經ぬるが本道小軍ありくるもろ
 郷民等悉く其場所小行向り閑道より出ぬ敵只一人もあ
 らざり其夜の内小若州佐垣へ着ぬ栗屋越中守と頼ませぬ
 種々饗應し奉り頰て松明より立敷心と盡しくる是より熊川の
 関とく江州朽木谷小掛らせぬ朽木河内守元綱の許へ只管よ
 ませ給ふ由仰らせし小軍兵と催して御迎ひ小参りくるを是も又
 變心せしやと危ぶと思召まされば松永彈正進と出某罷り向
 ひく元綱が心と引く見申さる一力一心がうると見候ぬ久秀は

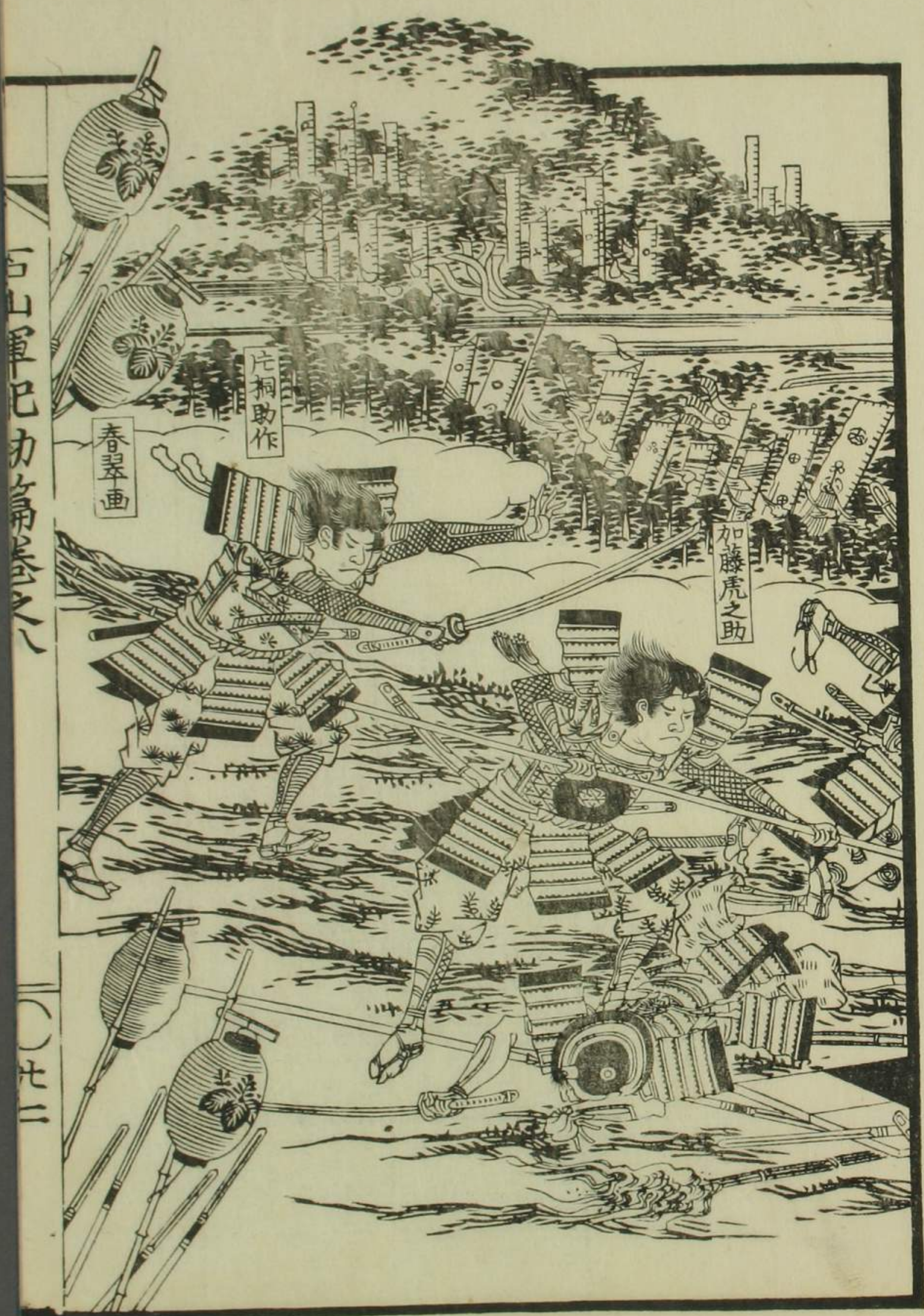
違へく死し候ふべしと馳向へ元綱甲と脱で軍兵と退信長と
 城中へ迎へ奉り終夜警衛し進らせ同月晦日事故るく京都を
 入らせぬも諸亦木下藤吉郎の三千餘騎うく敦賀の津り
 止り金が崎の城の破却せし跡小旗物と立あぶ大勢籠りたる
 体と見せ左右の山々の樹木の枝も色々の紙旗と拵へ結付せ
 所々小士卒五人三人宛かき終夜篝火と數十町の間小焼つけ
 三千餘人の勢と三手小分け一手に金が崎より十町許も進んで
 朝倉勢の押来る道條小埋伏させ秀吉自身に千五百餘騎
 ろく金が崎の麓小備へ旗馬印數多透間もなく立列ねるも大
 軍の様小見せ残る五百餘人の究竟の勇士と勝り彼伏勢の所よ

又十町許隔て進んで伏し。但此所の大事の場なり。竹
中半兵衛重治と大將として蜂須賀小六同又十郎堀尾茂助稻
田大炊助中村孫市青山新七同小助長江半之丞川口久助日比六
丸衛門尉ホと差向らる竹中是等と引卒して程よく所小待居
て却説廿五日小朝倉義景の信長金ヶ崎を攻りて因後詰の
軍兵と遣さんと評定ある處へ浅井の使者來りて一味同心
の趣を述べたる小より大小悦び両方より信長と扱て討を旨と
議定して浅井の使と返し。専ら合戦の用意となり。義景自ら大軍
と卒しく進發の催促あり。早馬來り手筒が峰と落
し。金ヶ崎の城危しと告りて。公亦有る早く加勢と差向べ

と。朝倉式部少輔景鏡小五千餘騎と授け走向ふと下知せし
ま。廿七日の早天又打立りて。小探んで府中まが來り。如小
金ヶ崎昨廿六日落城して中務丞景恒一乘が谷と志し。落來る
小出會り。諸軍の次第と尋ねり。信長大軍より勢猛く敦賀
表小充滿りと固く。勿く斯許の勢あり。勝跨りて大軍を對ひ
い。一戦のあぶる。一先引返し。義景と一手ふるて進び。其中
より浅井の勢も打出べし。然らば信長足と止る事能く引退ん
ば。必定なり。其時追討せむ。勝利疑ひありと決定し。景恒と打
連て一乘が谷へ引返して。義景の斯るべしと思ひ。寄ぎ一萬余騎と
從へ。廿八日の曙。一乘が谷と立て。金ヶ崎へと馬と進む。路次へ追

早馬來つて金ヶ崎落城の趣と注進。景恒城と関ひて士卒の命と助け爰まぐ落来るやと告るふ。朝倉勢力と落し足田津波九股等が手筒が峯うと討死せし志の程と感。然ながら信長勢い強くも。後小湊井切て出あ。暫時も猶豫とて。必ぞ直ち小引返さ。其退口と追討せば。目小余る大軍なりとも多。く。堀溝小落入と死する者も有べ。早推さ。と勇進んで打。ろふ。又りや知らせの早馬來り。淺井父子蜂起。切處小支へて。信長の飯路と妨んと謀る。小驚き。信長陣と拂さ。退く形勢。小候早。馳つけ御一戦なり。必定御勝利とて。注進あり。これ義景さ。有べくと悦び。道と急ぎ。朝倉景鏡。同景恒。小前波九郎兵衛。黒坂。

備中守と相添へ。一万五千餘騎。先陣小打。義景の二萬餘騎と。率して後陣。先陣とて。敦賀郡小打入。此時信長退き。まら。小候と遣。敵の容子と窺。む。小日。既小晩。近き物の相色。定。あ。も。織田勢。金ヶ崎の城中。城外。左右の山。小陣取。と見。焼。つけ。る。篝火の天と焦。其蔭。小旗指物。ひ。り。何。さ。ぬ。五。六。万。力。人。數。と。見。へ。て。駭。く。小。候。の。軍。走。り。如。此。の。は。告。る。景。恒。景。鏡。等。不。審。と。能。々。是。と。見。て。注。進。と。と。再。び。十。有。余。人。と。遣。は。見。せ。し。む。小。先。小。存。候。の。申。せ。し。小。違。と。り。信。長。引。退。ぶ。と。見。へ。り。然。ら。ば。今。夜。の。此。陣。と。り。長。途。の。勞。と。休。め。明。日。早。天。より。押。さ。せ。尋。常。小。軍。と。と。金。ヶ。崎。十。町。許。り。も。



木下一族の
童子等夜
討小伴して
大小働く圖



隔て野陣と張る是木下ヶ伏義景も然る是も竹中ヶ伏とて同十余町隔て
後邊小野陣と張て休息と勢の量たりし是も竹中ヶ伏秀吉が謀じし所少
も遅るは實小神小通はと云へ

義景事小臨んで智うりせば手筒ヶ峰の注進ありとも速小後
詰の手當あるは小浅井が使を受たは尚出陣と緩々として
尤八日に及びし事軍の機と知る故なり木下より是と察し先
陣後陣の陣と張るは所と考へて伏勢と埋ありと云へ

秀吉後殿して朝倉勢と脅しは並加藤福嶋行桐の三童軍功
去程小木下藤吉郎へりて設けし謀略の圖と云へは朝倉勢味く
と其坪小陣と取今朝より十有餘里の道と馳はも山路の難所

と云へ漸く小着しは身心勞と睡と萌し思ふ眼熟む者多
し木下の宵の程より自ら敵の容子と物見し既十分の時節より
あまると丑三過る刻分は手勢一千五百餘騎と三引分け正面尤
右小五百人々鳥銃ありと取りし麓の陣より打て出まは相圖の狼
煙と拳るやつる敵陣の左右小埋伏とせは一千餘人宵より構置
し樹木の枝小結付し松明と一度小燃し立は恰も數万の兵の
起し如く見へて荒涼くは形勢なり秀吉此火の明と得て陣と
作ら鐵炮と揃へて陣小打りは朝倉の陣中以外の外小周章あり
めと起上りて四面と見まは白晝みは寄手は幾方ありとも分
るは岡の聲鐵炮の音山谷小響ると天地も一時小崩れ計りは岡

えりうりよく織田家の軍勢十萬餘騎と関及び駒向ふく防
 ぐんと言ひの一人もあらず已が様々逃道と求りて敗走せしと朝倉景
 鏡同景恒黒坂前波の輩ふも味方と勵ませど一萬五千
 の軍勢の心々小騒ぎ立て制する下知と関が我先ふと崩立同士の
 討たるも又多うり竹中半兵衛重治の五百の勇士と引卒し後陣の
 邊りよ忍びより味方の相圖の火と見らうり山々の樹木小結つけ置
 一松明ふ一度小火とつけ燈しはく四五町が程焼つて數万の寄
 るる体と見せ関と奉てそ攻らる義景が本陣大おどろき狼
 唄廻つて乱らと堀尾蜂須賀青山稲田五百余人を率へつ関と作
 つて切廻り前後不覚小寐あぐと朝倉勢と突つて駈めけ撃つてを

走りつ要時の間小累々々々死骸の山とありける陣中の騒動大
 うとあつて義景原来事小臨と早速の思慮ある大將あるが甲
 冑も着し得る素肌の儘と馬小打の良等五六個と連て陣
 と遁ま出道とて敗走せしと大將のまきまき若やの
 討たあつと一入狼唄尋も廻ると竹中が手の者いよく勝つる
 て切立難立豎横無盡小働と中にも秀吉先年より親ひ置
 一族の童小加藤寅之助十歳 福嶋市松十歳 厅相助作十五歳とりよ者
 あり竹中ふ附て軍見物のめふ出させし朝倉勢の乱らる中へ
 走り入て相應ふ得物とありける竹中の思ひの儘ふ本陣と騒がせ先
 陣の勢の敗走して引返すと見て最早十分の勝利と速ふ引退くべ

として敗兵と路とくく金崎へ飯りたる景恒景鏡前波黒坂の徒
 の木下の夜討ふ追立ち且本陣の火の手小肝と消し我先と
 馳返まは是はいふ本陣の大將りつり落あひて味方の勢い入
 も見へて刺へ敵の既ふ引拂ひく影がふる皆々あきて忙然たり
 秀吉の十分ふ討勝分捕心の儘ふる竹中と待てるふ程あく重
 治りそり来り夜討の始末諸士の働さ夫々注進しなれば秀吉心
 地げふ打りい感賞のあると與へるとる内ふ夜いかのくと
 明ぬるの時分いと惣勢三千餘人手負をいそり有つまは物
 の員あは隊伍正しく敦賀表より凱陣の威風あつと拂きて徐
 と押来ると浅井一味の門徒の郷民此方彼所は打出て道と渡り

支へる朝倉の三万五千余騎とぶ小物ともせざる兵あるは思ひの
 俣ふ蹴散り路次ふ少の障りあく坂本まで飯り着り此時信長
 は京都ふあつ味方の兵と待めふ本道より引退る二万余人柴
 田池田の衆中路次の軍小勝て難なく都ふ上り信長の御座とふ
 泰上一軍の次第と言上るふ浅井ふ與せ一揆はははは門徒の
 浪人郷民なるりと関し召信長心中み免角石山本願寺と此俣
 小為かむ往々天下の憂とるる時節と見て是を除くごんば有
 べくべと思ひあはるる諸本道より退つる勢い難なく飯着りつる
 後殿の木下は飯り来らば路次より朝倉の大軍と合戦せむ
 頗る難儀小及ぶ若や討死やあへん何ふとも心許りとして安否

と知んぐら坂井右近前田又左衛門尉小三千餘騎と添へ途
中まぎ迎ひのりふ出されまゝの西臣畏りて即時小京都と發足
江州東坂本よりまゝ秀吉朝倉が三万五千餘騎と追散し手
勢三千餘騎と一人の欠る只今坂本小着せし所あり西士秀吉小
對面一將の御心配ある趣を告ぐ秀吉候と流して御芳志
の厚きを感心し三人打連て京都小歸りし信長偏小死し人の
蕪々思ひをり悦びぬと限りし早々召出さし軍の容子を
聞せぬ秀吉謹で義景の先陣景鏡景恒と追ちし渠ホが打
捨て候し甲冑兵器分捕仕り御土産小持参つせし馬廿余疋
鐵炮三百挺その外品々御覽小入し信長大に感し且驚と一大

事の退口小勢と以て大敵とら破り味方一人も失ふる利へ
敵の兵器と奪ひし歸り事古今未曾有の勲功とすべし昔
より進む軍小勢と以て大敵と破りし其類は多々れども退
口も然も敵小追まらざる僅の勢も勝利と得し者木下一人
ありべし末代とすも又有まらざる勇士哉と感嘆頻りある
秀吉面目と施し是全く愚臣が功小非ど殿の御高運と朝
倉が滅ぶる時節又出合し藤吉郎が仕合せと候ふと言上せ
し信長も機嫌よく將軍へも披露ありし將軍家
も秀吉の智謀無雙なりと感賞ありしなり

真宗傳法始末 附系圖 小本全三冊

真宗ノ教法易クシテ勝ル者アルヲ以テ古今之ヲ信
 スル者多シトス然レ氏祖師見真大師以來歴代宗主其
 法傳承ノ際ニ於テ何ナル功勲ノアリシヤ否ヲ知ルモ
 ノ少シ蓋シ之ヲ世ニ傳フル者ニ乏レキヲ以テ也本
 書ハ其歴代宗主治山ノ事蹟各自身子助化ノ多少別院
 開創末寺興廢等細羅シテ漏スコトナク加フルニ其系
 圖ヲ頭書ニシテ以テ談宗血脈相兼ノ次第ヲ知ルニ便
 ナラシム其末流ヲ汲ムノ諸君ハ細素ノ論ナク本書ヲ
 購読レタマハハ獨リ其傳法ノ始末ヲ知ル而巳ナラス
 亦其教旨ヲ領スルノ鳩益ヲ得ヘシ

明治十四年 新刻

板元敬白

繪本石山軍記初篇卷之八終

